

1 学校運営の中期目標

現状と課題 (○…成果 ●…課題)

【学力の向上】

- 「全国学力・学習状況調査」の結果では、算数Aを除き、全国、市を上回っていた。習熟度別少人数学習等、指導法の工夫による成果であろう。
校長経営戦略予算の活用により、「えのものの森」「学級文庫」の整備が計画的に着実に行われ、自然とのふれあい、読書への興味・関心は深まった。
- 児童質問紙でポイントアップを掲げた項目で、前回より下がっているものがある。これは、知識は高いが、意欲はまだ低いことを表している。

【道徳心・社会性の育成】

- 生活指導の対応件数は全体的に減少している。25 年度から、「副校長制モデル校」として、管理職 3 人体制で教育活動を進めている。教頭が以前より学級担任との連携が密に行われるようになったことが大きな要因である。
「暴力」「不登校」については 25 年度、対応すべき事象はなかった。保健室対応については、大規模校の児童数の割合からみると、高くならなかったことは評価できる。
「えのものの森」を「安らぎ・憩いの場」に整備・活用していることにより、児童の情操面が大いに養われ、心が安定している。今年度も、さらに、計画的な整備・活用を図り、社会貢献の精神（命を思う心情）を育成したい。
- 「いじめ」に関わる事象は「0」ではなかった。26 年度は、「0」を目指したい。

【健康・体力の保持増進】

- 「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果、男子は 8 種目中 7 種目、女子は 8 種目中 6 種目が全国・市を下回ったので、本校独自に児童の意識調査や各学年の実態に応じた体力向上の取り組みを行うとともに、運動能力調査を再実施した。その結果、それぞれのポイントは少しではあるが上昇した。
「朝食を食べて登校する」は「あてはまらない」「まったくあてはまらない」は約 1 パーセントまで減少した。
- 保健室対応については、防げるけがも多くあり、体力づくり、運動能力・運動習慣とも深く関わりがあると考えられる。26 年度は、健康・体力の増進が急務である。

【教職員の資質向上】

- 生活指導上の対応については、徐々に減ってきていることは、大きな成果である。保護者と連携を密にして、ていねいな対応を学校あげて行った結果である。
- 授業アンケート「授業がわかる」の項目の「よくあてはまる」が、24 年度より微増であり、目標までには至らなかった。また、保護者からの授業内容を理解しているかどうかの項目について、「よくあてはまる」と「あてはまる」までの評価を含めると約 6 割だが、「よくあてはまる」の評価が低かった。

中期目標

【視点 学力の向上】

“無答率を下げることは、各教科の各領域の正答率を高めることが大前提である”という基本的な考え方に立って、以下の目標を設定した。

＜国語＞

- ①「平成 24 年度全国学力・学習状況調査」（以後、「学テ」）結果で明らかになった、「話すこと・聞くこと」（A問題）正答率を「27 年度学テ」で、全校・市平均を上回る 90%にまで高める。また、「読むこと」（B問題）の正答率を「27 年度学テ」で、全校・市平均を上回る 80%までに高める。（ポイント上昇率は、1 年間で約 10%と設定）（カリキュラム改革関連）
- ②「24 年度学テ・児童質問紙」50.51 番の「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」を、80%に高める。ちなみに、「24 年度学テ」の 50.51 番の合計は、62%と 60%。（ポイント上昇率は、1 年間で約 10%と設定）（カリキュラム改革関連）
- ③全児童対象の「24 年度学校アンケート」（以下、「24 年度アンケート」）では、家で読書している数値が低い。「学級文庫」の蔵書数を、現在の各学級平均 20 冊を、27 年度には 100 冊（一人平均 3 冊）に増やす。（1 年間で、約 40 冊増書に設定）（マネジメント改革関連）
- ④図書館ボランティアの人数が、24 年度 20 名おられる。27 年度には 50 名にしたい。（年間 10 名ずつの増加をする）（カリキュラム改革・サポート改革関連）

＜算数＞

- ①「24 年度学テ」で、A・B問題共に低い正答率であった「数と計算」領域を、「27 年度学テ」で、共に 80%にまで高める。（ポイント上昇率は、1 年間で約 10%と設定）（カリキュラム改革関連）
- ②「24 年度学テ・児童質問紙」56.58 番の「あてはまる」を、「27 年度学テ」で、それぞれ、50%、60%に高める。ちなみに、「24 年度学テ」の結果は、29%、38%である。（ポイント上昇率は、1 年間で約 10%と設定）（カリキュラム改革関連）
- ③「24 年度学テ・児童質問紙」64.65 番の「あてはまる」を、「27 年度学テ」で、それぞれ、60%、80%に高める。ちなみに、「24 年度学テ」の結果は、33%と 44%である。（ポイント上昇率は、1 年間で約 10%と設定）（カリキュラム改革関連）

＜理科＞

- ①「24 年度学テ」で、低い正答率であった「地球」（47.6%）を、「27 年度学テ」で、70%に高める。（ポイント上昇率は、1 年間で約 10%と設定）好結果であった「生命」の数値もさらに高める。（カリキュラム改革関連）
- ②「24 年度学テ・児童質問紙」72 番（34.2%）75 番（18.9%）78 番（42.3%）を、それぞれ、55%、40%、60%に高める。（カリキュラム改革関連）

【視点 道徳心・社会性の育成】

“「学校・家庭・地域」総がかりの関係性の中で、子どもは育つ”という基本的な考え方にたって、以下の目標を設定した。

- ①「24年度学テ・児童質問紙」の結果より、28～36番の「あてはまる」を、それぞれ、1年間で約10%の上昇、と設定（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ②「24年度アンケート」の結果、「私にはいいところがある」の「よくあてはまる」（低…39%、高…7%）「学校のきまりや約束をまもっている」の「よくあてはまる」（低…30%、高…16%）を、毎年、10ポイントずつ増加させる。（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ③本校の「24年度いじめアンケート」（以下、「いじめアンケート」）の「仲間はずれにされる」「お金をとられる」「メールや携帯電話で嫌なことを言われる」が、ごく少数ある。27年度の「いじめアンケート」では、「0」にする。（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ④生活指導上の対応件数が、24年度は「ほぼ毎日5～10件」であった。この件数を、27年度には、「0」にする。（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ⑤「生徒指導上の諸問題に関する調査」項目の「暴力」「いじめ」「不登校」を、27年度には、「すべて0」にする。（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ⑥けが等での保健室対応件数が、24年度は「毎日約30件」に上った。この件数を、27年度には、「毎日約10件」に減らす。（年間、10件ずつ減らす。）（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ⑦地域・近隣学校園・東北地方（陸前高田）と連携・絆を深め、「えのもとの森」の活用を通して社会貢献の精神（命を思う心情）を育成する。（カリキュラム・サポート関連）

【視点 健康・体力の保持増進】

“自らの健康・体力に関心をもち、保持増進に努める子の育成”という基本的な考え方にたって、以下の目標を設定した。

- ①「24年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」（以後、「体テ」）で、男子は8種目中5種目が、女子は8種目中4種目が、全国・市の平均を下回っていた。27年度の「体テ」には、男女ともに、全国・市の平均を上回るようにする。（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ②「24年度アンケート」の「朝食を食べて登校している」の「あてはまらない」「まったくあてはまらない」が、「低…5%、高…3%」を、27年度には、「低…0%、高…0%」にする。（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）

【視点 教職員の資質向上】

- ①「24年度学校アンケート」の設問「授業がわかる」の結果で、「よくあてはまる」が、「低…36%、高…20%」を、27年度には、「低…80%、高…80%」にする。（カリキュラム改革関連）
- ②生活指導上の対応件数が、24年度は「ほぼ毎日5～10件」であった。この件数を、27年度には、「0」にする。（カリキュラム改革・学校サポート改革関連）
- ③「27年度授業アンケート」で、「お子さまは、授業の内容がわかるようになっていきますか」の項目について、「そう思う」と回答する保護者の割合を、全学年で70%以上にする。

2 中期目標の達成に向けた年度目標

【視点 学力の向上】

<国語>

- ① 「平成 24 年度学テ」結果で明らかになった、「話すこと・聞くこと」(A問題) 正答率を「26 年度学テ」で、全校・市平均を上回る 80%にまで高める。また、「読むこと」(B問題) の正答率を「26 年度学テ」で全校・市平均を上回る 70%までに高める。(カリキュラム改革関連)
- ② 24 年度学テ・児童質問紙」50.51 番の「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」を、70%に高める。(カリキュラム改革関連)
- ③ 「24 年度アンケート」では、家で読書している数値が低く、「学級文庫」の蔵書数を、現在の各学級平均 40 冊を、26 年度には 70 冊に増やす。(マネジメント改革関連)
- ④ 20 名の図書館ボランティアの人数を、26 年度には 30 名に増員できるように、保護者への呼びかけを図る。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)

<算数>

- ① 「24 年度学テ」で、A・B問題共に低い正答率であった「数と計算」領域を、「26 年度学テ」で、共に 70%にまで高める。(カリキュラム改革関連)
- ② 「24 年度学テ・児童質問紙」56.58 番の「あてはまる」を、「26 年度学テ」で、それぞれ、40%、50%に高める。(カリキュラム改革関連)
- 「24 年度学テ・児童質問紙」64.65 番の「あてはまる」を、「26 年度学テ」で、それぞれ、50%、70%に高める。(カリキュラム改革関連)

<理科>

- ① 「24 年度学テ・児童質問紙」72 番 (34.2%) 75 番 (18.9%) 78 番 (42.3%) を、それぞれ、45%、30%、50%に高める。(カリキュラム改革関連)
- ② 「えのものと森」の活用を通して、高学年の「生命」「地球」領域の学習につなげるとともに、低学年から自然環境に対する興味・関心の芽生えをつくる。(カリキュラム改革関連)

【視点 道徳心・社会性の育成】

- ① 「24 年度学テ・児童質問紙」の結果より、28～36 番の「あてはまる」を、それぞれ、約 10%上昇させる。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ② 「24 年度アンケート」の結果、「私にはいいところがある」の「よくあてはまる」(低…39%、高…7%)「学校のきまりや約束をまもっている」の「よくあてはまる」(低…30%、高…16%)を、10 ポイントずつ増加させる。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ③ 本校の「24 年度いじめアンケート」の「仲間はずれにされる」「お金をとられる」「メールや携帯電話で嫌なことを言われる」が、ごく少数ある。26 年度の「いじめアンケート」では、「0」にする。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ④ 生活指導上の対応件数が、24 年度は「ほぼ毎日 5～10 件」であった。この件数を、26 年度には、「毎日 3 件」にする。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ⑤ 「生徒指導上の諸問題に関する調査」項目の「暴力」「いじめ」「不登校」を、26 年度には、「すべて 0」にする。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ⑥ けが等での保健室対応件数が、24 年度は「毎日約 30 件」に上った。この件数を、26 年度には、「毎日約 20 件」に減らす。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ⑦ 児童・保護者・地域が「えの森」を活用して、東北地方(陸前高田)と絆を深めることにより、社会貢献の精神(命を思う心情)を育成する。

(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)

【視点 健康・体力の保持増進】

- ①「24 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査」で、男子は 8 種目中 5 種目が、女子は 8 種目中 4 種目が、全国・市の平均を下回っていたが、26 年度の「体テ」には、男女ともに、全国・市の平均を上回るようにする。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ② 24 年度アンケート」の「朝食を食べて登校している」の「あてはまらない」「まったくあてはまらない」が、「低… 5 %、高… 3 %」を、26 年度には、「低… 0 %、高… 0 %」にする。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)

【視点 教職員の資質向上】

- ①「24 年度学校アンケート」の設問「授業がわかる」の結果で、「よくあてはまる」が、「低…36%、高…20%」を、26 年度には、「低…50%、高…50%」にする。(カリキュラム改革関連)
- ②生活指導上の対応件数が、24 年度は「ほぼ毎日 5～10 件」であった。この件数を、26 年度には、「毎日 3 件」にする。(カリキュラム改革・学校サポート改革関連)
- ③「26 年度授業アンケート」で、「お子さまは、授業の内容がわかるようになっていきますか」の項目について、「そう思う」と回答する保護者の割合を、全学年で 60 %以上にする。

3 本年度の自己評価結果の総括

【視点 学力の向上】

「全国学力・学習状況調査」では、「話すこと・聞くこと」(A問題)の正答率が、全国平均を上回った。また「数と計算」領域の平均正答率がA問題では、目標を大きく超えて80%を上回った。これらの成果は習熟度別少人数学習等の指導法の工夫によることも一因であると考えられる。児童質問紙の項目についてもポイントアップが見られた。これは、児童の学習に対する関心や意欲の高まりが表れている。

校長経営戦略予算の活用により、「えのものと森」「学級文庫」の整備に関しては、計画以上に行えており、自然環境、読書への興味・関心がさらに高まってきている。

【視点 道徳心・社会性の育成】

児童質問紙の項目でも国語・算数同様、今年度は少しポイントアップしている。このことは、本校が掲げている「自尊感情」を高めることが少しずつ成果として表れてきたといえる。しかし、まだまだ十分な高まりとはいえないので、今後もさらに取り組みが必要である。

生活指導上の対応は全体的に減る傾向にある。今年度も「暴力」「不登校」については、対応すべき事象はなかった。「いじめ」に関わる事象は年々減少し、今年度目標の「0」にはならなかったものの、早期発見・早期対応により解決を図ることができた。昨年度より副校長を迎えて管理職3人体制を取り、教頭がこれまで以上に学級担任と連絡を密にとることができたことによる成果と考えられる

保健室対応については、児童の運動能力・運動習慣とも深いかかわりがあると考え、今年度は取り組みを強化した結果、来室数の減少も目標を達成し、病院に搬送すべき大きなけがも激減した。

「えの森プロジェクト委員会」を立ち上げ、教職員の思いや児童の自主性を大切にしたい「えの森」の活用を図ってきた。地域との連携のもと児童全員が種から育てた「忘れな草」の苗や、「花が咲く」の合唱DVDを陸前高田市の小中学校に贈呈するなど、社会貢献の精神（命を思う心情）を育成するができた。

【視点 健康・体力の保持増進】

「全国体力・運動能力・運動習慣調査」では、男子では3種目において、女子でも2種目が全国平均を上回った。体育の授業はもちろん、児童の遊びから見直し、体力向上の取り組みを進めた結果である。

ただ、「朝食を食べて登校する」児童については、昨年度「あてはまらない」「まったくあてはまらない」が1パーセントまで下がっていたが、今年度は、10パーセント近くにまで増加している。これは学校の取り組みが不十分であったのか、今年度の児童（家庭）の特徴であるのか検証して、来年度も取り組みを強化していく必要がある。

【視点 教職員の資質向上】

授業アンケートの結果では、「授業がわかる」という項目において、昨年度と比較すると8ポイントアップしているが、50パーセントという目標には到達できなかった。また、児童の授業内容理解について、保護者の回答は、「よくあてはまる」「あてはまる」では60%の評価があるが、「よくあてはる」だけではまだまだ低い評価にとどまっている。

生活指導上の対応は徐々に減少してきている。これは保護者との連携を密に図り、ていねいな対応を学校全体で取り組んだ結果の表れであると考えられる。今後もさらにていねいで細やかな対応を心掛けていく。